

青髭 6

明宏訊

儀式とは歴史に基づいている。かつては意味が明確だったことも、時が経過するにつれて不明になっていく。わからない部分は人々の想像力によって補填される。その過程によって見えない力によって増幅された文化という錯覚を生むのだ。ゆえに、神秘的な彩をなし、かつ、人々の宗教色を濃くしていく。

それは儀式の中心部にいる祭祀や貴族たちのみならず、直接的にそれに加わることができない、平民や奴隷たちにまで影響を与える。おそらく、神々が人間に与えた平和を維持するための手引書のようなものだろう。アンリはそう考えている。

いま、彼はその真っ只中に立っている。

華麗な衣装に身を包んだ女祭祀が使者として、伯爵家から送られてきたのだ。

まず、彼がこれから仕える人、カルッカソム伯爵に上申書が送られる。言うまでもなく、それにはアンリがギョイエン又従子爵家を継承する旨が古代文字で書かれている。それを受け取った伯は、かつて古い時代においてはナント王に了承を求めべくさらに上申したようだが、現在においては完全に形式だけとなっている。すなわち、単に事後報告すればいい、ということだ。

使者は伯爵の手紙を携えていた。

すぐに儀式を挙行し、その足で城まで赴くように、という趣旨である。

使者としてやってきた女祭祀は、そのための特別な魔法が存在するのか、外見上ぱっとみた限りでは年齢はわからない。彼女は人々に命じて屋敷の前に急遽、儀式のための社を立てさせる。

もちろん、従子爵家にも人夫はいるが儀式に関する工事にかかわることは許されない。使者である女祭祀が連れてきた者たちのみで行われるのでかなり時間がかかる。

その様子を、母である、アデラードをはじめとする家族たちも煌びやかな正装に身を包んで見守っている。

春の嵐が領内を吹き抜けていた。これから彼が仕える主から使者が送られてくる。おそらく、父であるジョフロアもそれを迎えたのだろうが、当時、この場にいた人間は誰もいない。

確か古くから続く儀式通りなのだろうが、ナント王の継承に関係するほどの力を持つ大諸侯の家老職の継承に関係する儀式とは思えぬほどに簡素だ。

しおらしく儀式に従っている外見を装いながら、この女性祭祀を観察する。

表情はいい。古くからある宗教的な彫像がこの手の顔をしている。あきらかに人間世界を超越していながら、人間から完全に離れているわけでもない。確かに美貌なのであろう。だが、さすがに聖職者ゆえに完全に肉欲というものを失せつけないオーラを放っているし、アンリもそれらしき情感を抱くことができない。しかし、この手の女性に絆される男もいるのだろう。もしかしたら、弟のルイなどはそういう性質を潜在しているかもしれない。

だが、意識は儀式とはべつのところを浮遊しはじめた。魂は肉体から離脱して時空を超越していた。

完全な貴族の礼装に身を包んだアンリは、その姿を鏡に映したとき、そこに立っている虚像を自分とは受け取れなかった。そこに、彼が思い映してはいけない誰かを投影していた。

ブーリエンヌ女伯爵。言わずと知れた、王都において彼が主人として仕えていた相手である。当地では単なる平民として彼女に仕えていた。しかし、そうおもっていたのは彼だけで最初の邂逅時から事実には知らされていたようだ。あの時も春の嵐が世界を通り抜けていた。

彼の時間と現在を結びつけるのは、芳しい匂いを運んでくる花である。

アルアジミの花が咲いている。国中がこの青紫の花弁で、ある意味汚されていくのだ。文学や音楽で、ナント王国の美の体現とまで言い習わされているが……女祭祀の歌声も、季節がいまならばこれを盛り込まないはずがない。古式に則った儀式の中に独創を入れ込む空間が用意されているという一点において、他国の、同種の儀式は祭礼とは一線を画している。祭祀や儀式を受ける側である、祭祀とアンリの間に関わられる、主と新たに家臣の誓をたてる、相聞歌のなかでそれは顕著に現れる。

アンリの声は、高らかにギョイエンヌ従子爵領はおろか、カルッカソム伯爵領土の全域に広がっていく。べつに儀式の練習などを積んだわけでもないのに、いざ、それに臨むと誰でも、その素振りが神性を秘めたように美しくなるのはどうしたことだろうと、昔から学者たちの頭を悩ましていたことだった。

ギョイエンヌ従子爵家の継承者の頭を過ったのは、今度は現実的な彩をなしていた。

これから、彼が仕えるカルッカソム伯爵とはいかなる人物なのか、そして、彼を中心に据えるとみえてくる複雑な図形への関心。

複雑な勢力関係のバランスにおかれた伯爵、しかし、自分はさらに不安な状況に置かれるのだ、ちょうど、大海の上に落ちた一枚の葉っぱのように。そのことに無関心なわけにはいかないのだ。

ギョイエンヌ従子爵アンリはその日のうちに主にまみえることになった。

「余は王ではない。本当のところをいえば、堅苦しい礼儀など鬱陶しいばかりだ」

「か、閣下……」

主君と家臣の、最初の邂逅は大広間で、ということだったが、なお、上級貴族はそういう儀式が大好きなものだが、伯爵はその大勢から漏れるらしい。アンリの予想と違って執務室がお目見えの場となった。自領で行った重々しい儀式とは比較しようもない。

伯はろくに彼の貌などみずに羊皮紙の山に釘付けとなっていた。

その横顔をみたとたんに、アンリは言葉を失った。それは父親の葬礼の儀式においてであった紳士にそっくりだったからである。特徴的な鋭角に跳ねる髭は、まさに、一般に噂されている、青髭、そのものだった。

新しい家老の視線に気づいたのか、伯爵は優雅な素振りで顔をアンリの方向に動かす。

「なるほど、ジョフロアの息子だな……」

しかしながら、あくまでも、それは疲れた目を癒すついで、というかんじであり、いい加減とさえいえる態度だった。とても、あの紳士とは思えない。それを証拠にすぐ羊皮紙の上に目を戻した。

アンリは、負けじと言葉を繰り返す。

「私は父に似ておりますか？」

「そういうこともあるのだな、という程度にはな……」

なぜか、儀礼のときのことを何う気になれなかった。しかし、そのような疑問は仕事をこなす上で雲散霧消していく。なんととっても、このだだっ広い城で働く人が少なすぎる。初邂逅はこのような塩梅で終わったのだが、人嫌いという噂は本当だったらしい。それはこの城内でもっとも地位の高い人間故のことだと思ったが、下働きの少年にたいしても同じ態度だったことがアンリを驚かせた。

中庭を見下ろす回廊を通っていたときのことだ。

彼はバラの世話を携わっていたのだが、伯爵がそこに足を踏み入れたことに気付かずに仕事を中断しなかった。背後に控えていたアンリは驚いていた。なんとなれば、このような場合、社会通念からいっても、そして、青髭と噂される伯爵に対する印象からも、少年が命を失うことは必定だったからだ。

しかし……、「あ、閣下、申し訳ありません！」と城主に気付いた少年は地面に額づいて謝罪しようとした。しかも、その場に鉄があったらしく頭を傷つけたらしく。赤い血が糸を作っていた。

「ジャック、頭をあげんか！」

それは首切りの前口上に思えた。

しかし、伯爵は胸元からハンカチを取り出すと、恐怖のあまり、いまだに額づいている頭を言葉や表情とは裏腹にやさしげな手つきで上げさせると、赤い血をぬぐい始めたのである。

「か、閣下……」

「従子爵、何かおかしいことを余はしているか？」

もしかしたら、アンリは少年以上に両足を失っていたのかもしれない。

こともあろうに、赤く汚れた布を自分の胸ポケットに入れたのだ。そして、恐れ入る少年に仕事を続けるように命じると何事もなかったかのように城の中へと入っていった。そして、鏡をみつめてわが身を映すところ言ったのだ。

「なかなか趣味のいい模様ではないか……」

伯爵のような階級に所属する人間ならば、通常ならばしないことを平然とした顔で行うのだ。たとえば、壮麗な行列を引き連れて平民たちの間を練り歩く、ようなことはありえないことだった。だから、ほとんどの人間は伯爵の顔すら知らない。だから、質素な服装で町中をアンリ一人を引き連れて歩く、などということも平然と行うのだった。そんな様子を見てみると、あの時の紳士について思いをはせる。もしかしたら、二人は同一人物かもしれない、あるいは、違うかもしれない。

だが、そんな物思いは、主人からの矢継ぎ早の質問に惱殺されてあさっての方向に飛び去ってし

まう。

「あの八百屋の野菜の値段は、先月はいくらだったのか？」

まさか、カルッカソム伯爵という、ナント王国内において7つに数えられる大貴族がこのように気にかけることはアンリの常識をはるかに超えていた。

この人は人嫌いなのか、そうではないのか、伯爵に関わればそうするほどにわからない要素が増えてきて定義が不可能になっていく。しかし、距離感が離れるということにはならないから不思議だ。彼は、あきらかに、それはアンリの自己満足かもしれないが、どうにか自分を信頼する方向に態度が向かっているように思えた。そう自負するだけの根拠は薄弱だったが、とりあえず、そう思うしかできることはなかった。